



Title	「生活日本語」クラスの実践の記録
Author(s)	永井, 智香子; 守山, 恵子
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.13, p.41-48; 2005
Issue Date	2005-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5611
Right	

This document is downloaded at: 2018-12-17T01:08:05Z

「生活日本語」クラスの実践の記録

永井 智香子*・守山 恵子**

キーワード：サバイバル日本語、生活日本語

1. はじめに

長崎大学留学生センターは1996年5月に省令施設として設置された。その年の10月から主に大使館推薦の国費留学生が半年間、日本語を集中的に学ぶ日本語研修コース（現在は集中プログラムと呼ぶ）が開講されるようになった。研修コースの初級の学生を対象として第3期（1997年10月から1998年3月まで）より週に一コマ、主に“サバイバル日本語”を教える「生活日本語」クラスを始めた¹⁾。そして、その「生活日本語」クラスは第17期（2004年10月から2005年3月まで）まで、7年半続いた。その間さまざまな試行錯誤を続け、クラスの内容も大きく変化した。

本稿では、「生活日本語」クラスを始めるようになったきっかけや、どのような試行錯誤がなされたのかを、実践の記録としてまとめた。さらに、2005年4月より独立した一つのクラスとしては「生活日本語」クラスを開講しなくなったが、開講の必要性が減った理由についても考えてみたい。

2. 「生活日本語」クラスを始めたきっかけ²⁾

「生活日本語」クラスを始めたきっかけは第2期（1997年4月から1997年9月まで）のある学生に起こった出来事にある。その学生は家族を呼び寄せるために「在留資格認定証明書」を取得し、家族に送ったが、EMSなどの書留にせず、普通便で送ってしまった。詳しく聞いてみるとその学生は郵便局で英語で「書留をお願いします」と言ったとのことであったが、通じなかったということである。運悪くその在留資格認定証明書は家族に届かなかった。郵便局もあらゆる手を尽くして調べてくれたが、「在留資格認定証明書」が入った封筒が家族に届くことも、戻ってくることもなかった。もし、その学生が「書留」あるいは「EMS」などという言葉を知っていれば、このようなことは起こらなかったのではないかと考えた。

この出来事がきっかけとなり、第3期（1997年10月から1998年3月まで）よりサバイバル日本語を教えるクラスを開講することになった。

3. 「生活日本語」クラスでどのようなことをしてきたのか

「生活日本語」クラスは続けているうちにその授業内容は変わったが、根底となる考え方は変わっていない。それは、“教室と外の世界をつなぐ”ということである。そして、そのことを毎回授業の初日に図を書いて示した(図1参照)。つまり、日本に来て間もなく留学生たちは教室で日本語の勉強を始めるが、一步外に出ると現実の“外の世界”がある。そこには敬語、長崎弁、友人との会話に使うくだけた表現、男性の日本語、女性の日本語、若者言葉など時と場

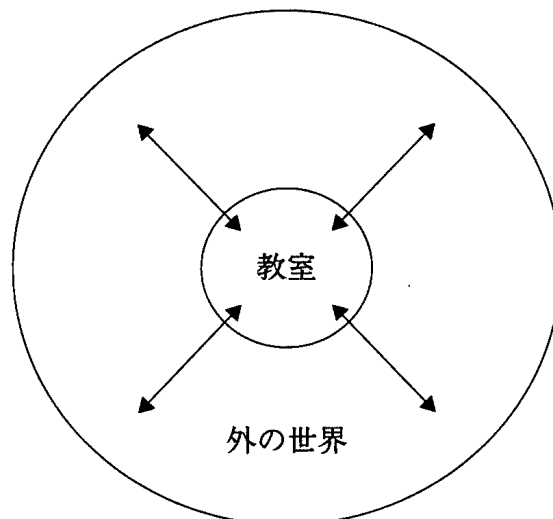


図1 「生活日本語」クラスの考え方

合によって使いわける様々な日本語が存在する。日本に来たそのときから留学生は“外の世界”との接触を持つことになる。そこで、“外の世界”での生活や人間関係を少しでもスムーズにするために、文法より“サバイバル”を優先させたのがこのクラスである。

前述のようにこの「生活日本語」クラスは15期、7年半にわたって続けた。ここでは、その活動の内容により「生活日本語」クラスを続けた7年半をA、B、C、Dの四つの時期にわけて振り返ってみることにした。それらの四つの時期とは①実習に重点をおいていた時期(時期A)、②敬語、生活漢字、SCSに重点をおいていた時期(時期B)、③話し言葉の練習、コンピュータ演習、諏訪神社見学を取り入れた時期(時期C)、④日本の食べ物の紹介、研究室に関することを取り入れた時期(時期D)である。表1はA、B、C、Dそれぞれの時期にどのようなことをしていたかをまとめたものである。以下それぞれの時期について簡単に説明を加えたい。

表1 「生活日本語」クラスの授業内容一覧

時期	授業内容
A	<ul style="list-style-type: none"> ・郵便局で必要な会話の練習 ・郵便局での実習 ・病院での会話の練習、病状を表す言葉の練習 ・保健管理センターでの実習 ・乗車券（バス、JR、飛行機など）を買うときの会話の練習 ・大学生協での実習 ・アパートを探すときの会話と必要な言葉の練習 ・大学生協での実習 ・長崎弁について、長崎弁の聞き取り練習
B	<ul style="list-style-type: none"> ・生活会話（例：「お願いします」「～をください」「～はありますか」） ・敬語1（敬語の説明と尊敬語：例「いらしゃいます」「めしあがります」「おっしゃいます」） ・敬語2（敬語の授受表現） ・敬語3（尊敬語と謙譲語） ・SCSを使って熊本大学と琉球大学の集中プログラムの学生と交流1 ・SCSを使って熊本大学と琉球大学の集中プログラムの学生と交流をするための準備 ・SCSを使って熊本大学と琉球大学の集中プログラムの学生と交流2 ・生活漢字1 ・生活漢字2 ・カラオケ（日本語で歌を歌ってみよう） ・長崎弁について、長崎弁の聞き取り練習
C	<ul style="list-style-type: none"> ・生活会話（例：「お願いします」「～をください」「～はありますか」） ・敬語（敬語の説明と簡単な敬語の練習） ・コンピュータ演習1（ネットを使って専門用語の読み方を知る等） ・コンピュータ演習2（ネットを使って専門用語の読み方を知る等） ・さまざまなあいさつ ・諏訪神社訪問 ・長崎情報（雲仙、島原、長崎の観光地などについて） ・カラオケ（日本の歌を歌ってみよう） ・長崎弁について、長崎弁の聞き取り練習

D	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に必要なインフォメーション ・生活会話(例:「お願いします」「～をください」「～はありますか」) ・長崎情報(長崎の交通機関、観光地など) ・生活漢字(身の回りの漢字を認識する。例:長崎大学、非常口、止まれ) ・フィールドトリップ(雲仙、島原)についての説明、諏訪神社についての説明 ・諏訪神社訪問 ・長崎の食べ物、日本の食べ物について ・さまざまなあいさつ ・日本の歌(“世界は二人のために”など) ・口語的な言い回し ・長崎弁 ・研究室での生活について
---	--

3-1 実習をしていた時期(表1では時期Aに相当)

ここでいう“実習”というのは教室で場面を設定して会話の練習をしたあと、実際にその表現が行われている場に行って練習してみるというものである。実習を行ったのは1997年度の後期から1999年の後期まで5期、つまり2年半である。その間、ティーチングアシスタントとして2名の大学院生にも加わってもらった。

クラスの基本的な進め方は2コマで一つの場面を終えるというペースであった。最初の一コマでその場面に関連した情報と必要な語彙を与え(たとえば、郵便局であると、場所、営業時間、さまざまな郵便局のサービスについて説明)、場面の会話練習と場合に応じて、必要な漢字の認識練習をする。その際、より効率をよくするためにクラスを三つのグループに分け、2名のティーチングアシスタントと教師がそれぞれのグループを担当した。そして、二コマ目に実践練習をした。実践練習の際にも3つのグループに分けて行った。実際に行った場所と場面は、大学の近くの郵便局(郵便を出す、切手などを購入する)、大学内の保健管理センター(病状を説明する)、学内生協(飛行機、バス、電車の切符購入、アパートを探す)である。さらにそれぞれの場所に行くときにはビデオカメラを持って行って撮影し、のちに学生一人一人にフィードバックをした。

1999年の4月からはクラスのテキストとして『留学生のための長崎生活ガイド』とその付属会話教材『きょうから話そう』を使用するようになった³⁾。

3-2 敬語、生活漢字、SCSに重点をおいていた時期(表1では時期Bに相当)

この時期の3本柱は「敬語」と「生活漢字」と「SCS」であった。

敬語を「生活日本語」クラスに入れるようになったのは2000年前期からであった。集中プログラムで使用しているテキストは『新日本語の基礎I』『新日本語の基礎II』であるが、このテキストでは敬語は最終文法項目なので学期の最後に学ぶことになる。研究留学生にとっては、指導教官と話すことは非常に重要なことであるが、そうした場面を考えると比較的早い時期から最低限の敬語が使えるようにする必要があるのではないかと考えた。当時のスケジュールでは敬語を前半に一コマ(敬語についての簡単な説明と「いらしゃいます」「おっしゃいます」などの尊敬語の特別な形の練習)、中盤に一コマ(「～てくださいませんか」「～ていただきたいんですが…」などの敬語の授受表現)、終盤に一コマ(「お～になります」などの尊敬語や「申します」「いたします」などの特別な形の謙譲語)勉強している。

生活漢字のクラスは99年度の後期より始めた。非漢字圏の留学生が、ゴミの分別、買い物における肉の分別、砂糖、塩などの粉の分別など身の回りの漢字を識別できることを目標とした。生活漢字のクラスは二コマで、最初の一コマで自作のテキストの中にある「駐車禁止」「引く」「押す」「非常出口」「燃えるごみ」などのキャンパス内にあり、学生が目にする漢字が実際どこにあるか、場所を確認した。そして、二コマ目にクイズ形式で実際に認識できるようになっているかを確認した。さらに、日常生活においてさまざまな申込書に日本語で記入する機会が多いと考え、郵便局の口座開設の申込書などを使い、記入してみる練習をした⁴⁾。

SCSを使用しての他の留学生センターとの交流は1999年度前期から2000年度後期まで2年にわたって続けた。最初は熊本大学留学生センターと行っていたが、後に琉球大学留学生センターも加わった。SCSには三コマ使った。まず最初の一コマで画面上で顔合わせをおこなう。そして二コマ目で発表の準備をし、3コマ目でそれぞれの土地について映像を用いて発表しあうというものであった⁵⁾。

3-3 話し言葉の練習やコンピュータ演習や諏訪神社見学を取り入れた時期 (表1では時期Cに相当)

2002年度後期からは内容が古くなったので『きょうから話そう』を使うのをやめ、新たなシラバス(内容については表1参照)に沿った自作教材を使うようになった。そのときから新しく加わったのが話し言葉の練習とコンピュータ演習である。

話し言葉の練習では「～きゃならない」「～しちゃった」「～してる」など、日本人が会話のときによく使うが、初級教科書では取り上げられていないものをいくつか取り上げた。

コンピュータ演習では、コンピュータを使って読み方がわからない漢字に出会ったときどうするかという練習や、ネットを使って各自が日本語での専門用語を探し出し、リストを作るという練習を行った⁶⁾。

「長崎くんち」で有名な諏訪神社に見学で訪れるようになったのは第15期(2003年10月～2004年4月)からである。やはり、「外の世界」との接点を少しでもつくりたいと考えてのことであった。

3-4 食べ物の紹介、研究室での生活に関することを取り入れた時期(表1では時期Dに相当)

2004年度前期以降、コンピュータ演習は、ワードを使って日本語入力の練習をするコンピュータクラスの一部とした。そして、新たに「日本の食べ物、長崎の食べ物」「研究室での生活」を加えた。

「日本の食べ物、長崎の食べ物」というタイトルの食べ物の紹介の時間を加えた理由は、学生たちが、日本や長崎の代表的な食べ物を見たことも聞いたこともなく、スーパーマーケットなどで目にする食品が何なのかもわからないことが多かったからである。クラスでは、写真や映像で代表的な食べ物を見たり、説明を聞いたり、そして、実際に味わったり、一緒にスーパーに出かけて日ごろ知りたいと思っていたものの正体(何でできているのか、どうやって食べるのかなど)についての説明を聞いたり、買って試食をしたりした。

「研究室での生活」では、研究室でよく使われるあいさつのことば(「おつかれさまでしょうた」「ごくろうさまでした」「しつれいします」など)の使い方や、スムーズに研究室での生活に適応するための心得(たとえば、先生にアポイントメントをとること、わからないことはチューターやほかの学生にきくこと、

研究室のルールややり方を覚えることなど) をとりあげた。

日本語集中プログラムで日本語を学んでいる学生たちは、その期間、「温室」の中にいるようなものである。周りの学生たちの言動を十分に観察する必要もなく、事務職員、教員、ボランティア、留学生仲間などが学生を理解しようと努めてくれる。しかし、研究室での状況は、留学生センターの状況と同じではない。留学生センターで日本語を学習している間と、研究が生活の中心になってからとでは、違いがあることを心得ておくことが適応を少しでもスムーズにするために役に立つと思われる。

4. まとめ

「生活日本語」クラスは1997年後期から2004年後期まで7年半にわたって続けた。その間、さまざまな試みをし、学生たちの評価も高かったが、2005年度前期は開講していない。開講しなくなったのは、学生を取り巻く状況が変わってきたからである。

まず、インターネットの充実である。「生活日本語」クラスを始めるようになったきっかけは、郵便局で起こったある出来事であった。郵便局は開講当時、新しく来日した留学生にとっては家族へ手紙を送るなど、非常に大切な場所であったといえる。しかし、最近ではインターネットの発達により、学生が来日して最初に行きたいところは郵便局ではなく、ネットにつながったコンピュータがあるところになった。さらに、ネット社会の発達により来日直後のみならず、留学生らは来日前から生活に必要なさまざまな情報が得られるようになった。

つぎに、留学生センターの留学生支援体制の充実がある。留学生センターが省令化された施設となり、まもなく10年がたとうとしている。その間に、チューター制度や会話パートナープログラム、留学生同士のネットワーク、ボランティアとの出会い、オリエンテーション、ホームページ、情報冊子など、留学生センター内外での留学生支援システムが以前より充実してきた。

このような留学生をとりまく状況の変化により、「生活日本語」クラスの必要性が以前ほどはなくなった。

ただ、「生活日本語」クラスで取り上げられていたことが今は全く教えられていないわけではない。生活会話、日本語の話し言葉、長崎情報、長崎弁、諏訪神社見学などを現在も他のクラスに組み込んでいる。見学先については諏訪神社だけでなく、長崎の地域の特徴ある施設なども加えるなど、さらに充実させ

たいと考えている。

注

- 1) このクラスの名前は「日本語演習A」「日本語演習B」「日本語演習II」などの呼び名を経て、2001年4月より「生活日本語」となった。
- 2) 「生活日本語」クラスをはじめるきっかけについては「『留学生のための長崎生活ガイド』と付属会話教材の作成」『長崎大学留学生センター紀要』(1999) 第7号 pp35~44にも簡単に紹介した。
- 3) 『留学生のための長崎生活ガイド』と『きょうから話そう』については『長崎大学留学生センター紀要』第7号(1999) pp35~44に詳しい。
- 4) 生活漢字のクラスについては『長崎大学留学生センター紀要』第8号(2000)「生活漢字」教材作成の試み pp31~37に詳しい。
- 5) SCS を使った他大学との交流の試みについては「初級日本語学習者のためのSCSを使った協同学習の実践—長崎大学と熊本大学による二度の試みと次回へ向けて—」『長崎大学留学生センター紀要』第7号(1999) pp63~75、「SCSを使った日本語共同学習の改善へ向けて—熊本大学と長崎大学の3度目の実践から—」『熊本大学留学生センター紀要』第4号(1999) pp31~49、「初級日本語学習者のためのSCSを使った合同学習の可能性について」『熊本大学留学生センター紀要』第5号(2000) pp83~93に詳しい。
- 6) このコンピュータ演習の取り組みについては『長崎大学留学生センター紀要』第12号(2004)「集中プログラムにおけるコンピュータークラスの実践」pp15~25に詳しい。

(*留学生センター助教授、**元同講師)